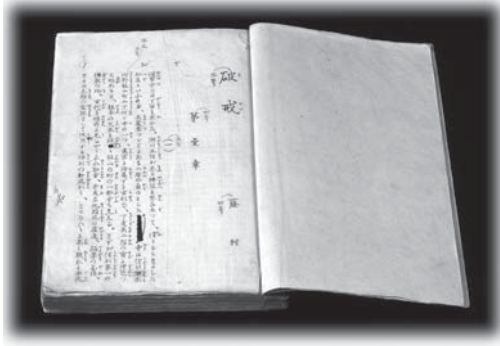


き人物」と書いている。小諸義塾の教師として二七歳の時赴任してきた藤村は、てつ夫人の実家近くに住んでいたことから猛と親しくなり、志賀の家へもたびたび招かれるようになった。

その頃の藤村は、塾生たちに英語を教えるかたわら、小諸や千曲川などを題材とした詩や文のほか、小説『破戒』を書き始めていて、小説の挿絵にする写真を猛に頼んでいた。しかし、藤村の給料は二五円と安く、本を出版する費用四〇〇円の捻出に苦しんだが、妻の実家や、猛からの生活費の援助もあって一九〇六（明治39）年に『破戒』は出版された。

本の扉には「この書の世に出づるにいたりたるは、函館にある泰慶治氏、及び信濃にある神津猛氏のためものなり。労作終るの日にあたりて、このものがたりを二人の恩人のまへにさへぐ」とある。小諸を去る時に、藤村は松の板でつくられた机と硯、後に『破戒』の原稿を猛に贈って、感謝の気持ちを表した。



『破戒』の原稿（北野美術館蔵）

その後も、藤村がフランスに滞在し帰国するまでの間、留守宅へ仕送りするなど、猛と藤村の友情は生涯にわたって続いた。

### ●銀行から松根油まで

第一次世界大戦の影響により、日本は好景気を迎え、佐久地方は養蚕と製糸業が盛んになった。一九一七（大正6）年、志賀銀行を興し頭取となった猛は、佐久の製糸業を支え、事業は収益をあげるようになった。一九二三（大正12）年には中信銀行の頭取、さらに五年後には資本金一四〇〇万円の信濃銀行の常務取締役となり、東北信の産業の発展に大きな役割を果たした。

ところが、一九二九（昭和4）年にニューヨークから始まった株価大暴落の影響が日本にも広がり、生糸の値が下がったことから、長野県内の製糸工場もつぎつぎに倒産した。製糸業者に貸していた金もどらなため、信濃銀行は大きな赤字を抱え、預かっていた金を返すことができず、経営を続けることができなくなってしまう。

猛は銀行の責任者として、志賀の家を残し、田畑・書画・屏風などの私財千数百点を売り払ってしまった。そこには「本来無一物」という禅の精神が生かされ、全財産を失っても苦しみを表に出すことはなかった。五二歳になった猛は、瀬下清や大沢喜市らに相談し、上京して釈宗演老師の年譜の編さんなどを行っていた

が、日中戦争が始まった一九三七（昭和12）年の秋に再び志賀にもどった。

太平洋戦争の終わりが近づくと、燃料が不足するようになり、国は松から油を取る計画を立てた。神津家の裏山には松の大木が生えていたが、すでに切り出してしまうっており、残った松の根が勤労奉仕隊によって掘り出された。

猛の長男得一郎は農芸化学の専門家で、松根油をつくる装置の設計から製造までを行った。父子は研究を重ね、製造に成功した松根油をドラム缶に入れて送った。しかし時すでにおそく、日本は終戦を迎えた。

戦中・戦後の食糧不足と、昼夜にわたる松根油製造の仕事は、猛の健康をおしばんでいた。明治時代から大正・昭和にかけて佐久の文化を育て、生涯を金融や産業の発展につくした猛は、終戦の翌年、一九四六（昭和21）年六月二日、六五歳でこの世を去った。

（小林収）

### 参考文献

- 大澤洋三 『赤壁の家』 ほおずき書籍
- 伴野敬一 「神津猛の考古学と江上波夫」 『佐久』 第58号
- 佐久史学会

## 佐久の先人たち②7

### 佐久の文化と産業を支えた

こうづ たけし  
**神津 猛**

(1882~1946年)



志賀の豪農に生まれた猛は、若い頃に東京で学んだ学問を故郷に生かし、佐久の考古学や文学を育てた。日本の産業が近代化すると、家の資産をもとに銀行を開いて、東北信の製糸業を支えた。佐久の文化を高め、金融や産業の発展につくした人であった。

#### ●生いたちと修業

神津猛は一八八二(明治15)年、志賀村(現佐久市志賀)の神津禎次郎の長男として生まれた。神津家は「赤壁の家」と呼ばれる豪農で、江戸時代の天保年間(一八三〇~四三)には田畑五〇はたけをもち、一年に年貢米が数百石も運びこまれるほどの資産家であった。

猛が一歳の時、長い間神津家を支えてきた祖父の包重が亡くなる。遺言により病気がちだった父に代わり、家を相続することになった。慶應義塾の幼稚舎に学ぶかわら、鎌倉で療養していた父に連れられ円

覚寺を訪ねた猛は、釈宗演老師から禅の教えを受け、後に「松岳」の道号を与えられた。慶應義塾に入ってから俳句を始め、高浜虚子を師とあおぎ、二千余の句を詠んでいる。禅と俳句は生涯を通して真剣に打ちこんだ修業であった。

猛はそのほか木彫・写真術・考古学を学び、一八九九(明治32)年四月、慶應義塾を卒業すると、志賀の家へもどった。縁談の準備を進めていた母くらが突然倒れ、亡くなってしまう不幸があったが、その年の十二月に小諸の塩川家の娘と結婚した。猛は父の教えを受けながら、家業に専念することになったが、その父も一九〇二(明治35)年一月に病気が悪化して永眠した。

#### ●考古学の発展につくす

一八九八(明治31)年、東京帝国大学の坪井正五郎



神津猛が生まれた赤壁の家

が芝公園丸山遺跡を発掘していた時、慶應義塾に在学していた猛は、福澤諭吉に連れられて毎日のように埴輪や人骨片の採集を手伝い、考古学に大きな興味をもつようになった。

結婚した翌年の春、平賀村(現佐久市平賀)瀬戸の八幡神社の神職が、土器や石器の収集家であることを聞き、それらを見せてもらうため訪ねた帰りに、畑の中で打製石斧や矢じりを発見する。その後も畑で薄手の土器や須恵器の破片を採集した。

さらに桑畑の中にあつた三つ塚から、土棺の破片と植物の破片などを採集し、先に発掘した人から、直刀二本と板碑をゆづり受けた。猛は東京人類学会に入つて専門家を信州に招き、内山・前山・大沢などへ案内して、矢じり・石さじ・石斧・曲玉など多くの採集品を発見した。

考古学に熱心に取り組んだ猛は、南佐久の遺蹟を人類学会に報告した阿部恵吉らの同志を得て、一九二九(昭和4)年には信濃考古学会を結成、自費で「信濃考古学会雑誌」を発行し、発掘物を独自の方法で整理するなど、考古学の発展につくした。

#### ●島崎藤村との友情

一九〇四(明治37)年、猛は小諸義塾を訪れ、塾長の木村熊二や島崎藤村と初めて会った。その日の日記に「島崎氏は非常に快活な人で、立派な紳士とみるべ